

「自分らしさを実現する学び・楽しみ」

～成人期就労系事業所における余暇支援の取り組み～

茨城 あすなる園 岡崎喜一郎

あすなる園は、1986年に認可され、入所授産施設として23年、そして、自立支援法下での多機能事業所・ケアホームへ移行して5年が経過する。

【ゆとりある時代】

入所施設時代初期は、「めあて」のある暮らしの場づくり、また、生活圏の拡大を目指して季節ごと行事に取り組んできた。春はスポーツ大会、夏はキャンプ、秋は地域祭り・収穫祭、そして、冬は合唱やダンス・障害者問題を訴えた発表会などで緊張感や達成感に浸った。また、自治の学習を通して、自分たちによる暮らしの場づくりを学ぶなかで、利用者が主体となってボーナス闘争も経験した。

10年経った頃、施設全体で取り組む行事が、70人の利用者と職員・家族・ボランティアで約200人以上にもなり、ときに規模が大きすぎて、利用者の思いと乖離してきているとの反省もあり、利用者のより主体的な参加を目指して、希望制のサークル活動に移行し、通年実施してきた。

毎年、希望に沿ったものを模索しながら、以下を約9年間実施した。

- ・サッカー ・スポーツ ・山登り ・マラソン ・音楽 ・料理 ・写真 ・手品 ・絵画
- ・外食 ・園芸 ・映画 ・釣り ・パソコンなど

手品サークルは、地域の老人施設に慰問をし、芸を披露した。

【厳しい時代へ、自己負担の強化】

2003年からの支援費制度へ、さらに、その後の自立支援法へと移行するなかで、正規職員数が削減され、また、利用者の自己負担額の割合が増えていった。そして、利用者の高齢化とともに体力の衰えも目立つようになり、楽しみ活動を全員共通の水準で実施することが難しくなってきた。

併せて、日中は就労系事業所として、工賃向上の理念の下、労働に実践を特化させる傾向が強くなり、楽しみ活動は、4年間、縮小の方向に流れてきた。個人の責任で楽しみを見つけることを求めた時代とも言える。

しかし、自分で楽しみを見つけることが難しい利用者は、寝る時間が長くなったり、職員の後をついて歩いたり、時間をつぶすことに苦勞していた。また、殆どの時間を自分の部屋で過ごし、誰ともかかわりを求めない姿も見られた。

【余暇支援の更なる見直し期】

我々職員としても、こうした姿にはやはり寂しさを感じ、2010年、全利用者の「夢・願い」を聞き取り、それをもとに、希望のある余暇支援をすすめることを再確認した。

私が担当する男性ケアホームでは、土曜日を使った活動で、18人が5つのグループに分かれてそれぞれのねがいをすり合わせて一つの活動することにした。バーベQ、遠出の買い物、日頃から食べたいと思っていたものを食べに行く、温泉などなど。そして、夏は、避暑地に日帰り旅行等々を行ってきた。また、願いや楽しみ実現の支援とともに、更なる願いの引き出しも行ってきた。なんでも提案していいんだという意識を根付かせたかった。

その中から、男子ケアホーム3棟合同での平日夜の活動として、「喫茶店をやって、みんなで集まろう」との提案が出た。勿論、それはそのまま実行し、週一回一時間お茶とお菓子で、仕事や余暇の企

画について意見交換の場としてきた。それが定着してくると、今度は「赤ちょうちん=居酒屋」の希望も出され、月一回実施している。さらには、お菓子屋の常設の希望などにも繋がっている

【楽しみから充実感・達成感の支援へ】

居酒屋を始めて3年が経過するが、ただお客さんとして参加するだけより、自らがアイデアを出し、主催する側・運営する側、それくらいの意識の方が楽しさは大きくなり、充実感に繋がることを確認してきた。この間「利用者が起案の中心になること」を軸にしてすすめてきた。

アイデアを言葉にして表現できない方については、とにかく支援者の意見が主導的になりがちで、ともすると、支援者に楽しませてもらうという意識が強くなり、受け身的になる。本人の持っているスキルを最大限に尊重し、一語でも「温泉がいい」と言えれば、それほどの思い入れや提案の背景は弱いにしても、実際行って見て本物の温泉を体験することで、その人が中心になって考えた企画になる。自分が起案することで主体的になり、達成感は大きくなる。

今年2月の企画で、大雪の中、ひな祭り見物に行ってきたグループがあった。周囲から無謀だと言われたが、旅行雑誌の好きな人が、そこからヒントをもらい、アイデアを出したことに對し、担当支援者はそれをどうしても達成させたかったのだ。また、素朴な提案、身近な願いでも、実施後に「いい企画だったね」と評価しあう関係も大切にしてきた。ただ何かを食べに行く活動でも、共同で取り組み、共感する関係があることで、楽しさを倍増させることができる。昔ほどの予算をかけられない今、どう達成感につなげるか、一層の工夫が求められる。ケアホームに移行し個室が保障され、プライバシーが大切にされる暮らしになったことで、共同の意味があらためて意味を持ってきた。

【自分の人生は自分が決める】

こうした取り組みに加え、事業所や職員への要望・苦情を集めることもすすめてきた。こうした中、これまで親の意見は絶対で、親の指示に對し従順に生活してきた二人の方が、最近自分の意見を口に出し、さらには「僕はこれをやりたいんだ」と親に反発する姿が見られるようになった。「自分のことは自分が決めるんだ」と、これまでの余暇支援の中で学んだようだ。大切な学びの視点であると考えている。

【余暇の意味】

昔の山登りサークルで、富士山やアルプスを目指し、頂上に立った者、途中断念した者、いずれも心の底から喜んだり悔しがったり、単なる楽しみレベルでは語れない世界に浸った。そこからの教訓として、今、余暇支援に活かしたいことは、何らかの「楽しみ」という世界・そこで終わっていいという時と、充実感や達成感への高まりを求めていく世界・そこまで求める時があると考えている。

余暇の世界では、自分なりに目標を定めて自分の流儀で起案する。厳しい仕事に日々向かっている人は、楽しみやホッとして疲れを癒す場が必要であり、逆に、趣味の世界で挑戦を繰り返し、強い達成感や自己実現を求めていく人もいる。余暇活動の意味は、楽しむか、達成感を得ようとするのか、人それぞれであり、場面々でも求めるものが違うはずである。何をねらうのかをしっかりと押さえないければならない。

余暇での達成感とは、「自分らしさの実現」であり、その意味では労働におけるものとは違うと考えている。就労系事業所で、今、余暇支援をどのように位置づけるか課題は多い。しかし、障がいを持つ人の生活のどこかに余暇での楽しみや達成感とは位置づけられるべきである。事業全体を見渡して、どこが担うのかも今日的には大きな課題である。